



チェルノブイリ事故から10年経ちました。汚染地域で暮らしている人々は、どのような生活を送っているのでしょうか。4月のスタディー・ツアーで訪れた、ジトーミル州のナロジチ地区で、大変ショックな事を聞きました。地区の人民代表委員（市長さんのような人）のザイチェクさんは、昨年7月に訪問したときは「一日も早く全員移住したい」と言っていたのですが、今年の4月には、「移住は国にお金が無くてもう限界。今後、汚染地域でどうやって暮らしていくかを考えている」と言いました。ナロジチの人口は事故直後の移住で14000人までへったのですが、今は帰ってくる人が相次ぎ、17000人にまで増加しているのです。

上の図はウクライナにおけるこの10年間の放射能による全住民の被曝の合計（集積線量）です。ジトーミルを始め汚染のひどい

北部の州では、被曝の程度が大きいだけでなく、体内被曝が7-80%を占めていることがわかります。つまり、被曝は主として汚染した食べ物によるのです。汚染した畑で作物を作り、汚染した肉やミルクを食べ、汚染した森の中で山菜やきのこを採って食べてきた結果がはっきりと顕れています。10年前に汚染した森の木の葉は今ようやく腐葉土になり、植物に吸収され易くなっています。実際、森の土壌の表面から5-10センチ位下が現在最も放射能レベルが高く、木材中の放射能は最近になって急に増加し始めています。これからも汚染地域で住み続けなければならない人々にとって、食べ物を通じた被曝はこれからも長く続きそうです。不本意にも、原発事故の実験台となった彼らが、絶望的な気持にならないよう祈るばかりです。（河田昌東）